## 大王の香水師

慎太郎は、アラビア語の挨拶がだいぶ自然に出るようになった。

リヤド支店の警備員、ハリド、ファハドの二人はほとんど英語が喋れなかったから、慎太郎がアラビア語で挨拶をするとこれ以上は無いという笑顔で挨拶を返した。

始めの頃、慎太郎が、

「サバハ・ルヘイル(おはよう)」

と言うと、

「ミスター・イケナミ、応えは何と言うか知っているかい」

と聞いてきた。

「サバハ・ヌールだろう」

と言うと、感心して、

「そうだ。それでは、午後の挨拶は知っているかい」

と続けて聞いてきた。慎太郎がとぼけて、

「知らないね。一体なんていうんだい」

と聞くと、得意げに、
「マーサ・ルヘイル(こんにちは)だよ」
と教えた。
彼等は慎太郎に何か教えたくていつもむずむずしていた。
二人とも人が良くお節介なほどだったが、とにかく気さくに話しかけてくる慎太郎を大層気に入っていたのだ。

ラミアともいつもアラビア語で挨拶をした。そして、彼女の前を通る度に何か見つけては短い会話をするようにした。
いつも、まるで花園にいるような香水の芳しい香り、キラキラと光るカラフルなアラブの服装が慎太郎の気持ちを和ませてくれた。ラミアはファイサリア・モールの美味しいレバノン料理店のこと、ファイサリア・ホテル近辺の美味しい店のことなどを丁寧に教えてくれた。彼女もハリド、ファハドと同じで慎太郎に何か教えるのを楽しみにしていた。
また、ラミアはハッカの入った紅茶を良く飲んでいたが、慎太郎がめずらしそうに覗き込んだりすると、早速、慎太郎の部屋にそれを持って来てくれたりした。そんな気の利く、

根が明るい気立ての良い子だった。
ラミアは、音楽を聴くのが趣味でいつもテーブルの上にアップルコンピュータのｉＰＯＤ(アイポッド)を置いていた。休憩時間には、ヘッドホーンを繋げて何やら聴いていることが多かった。

「ラミア、何を聞いているの」
「レバノンの音楽です」
「どんな音楽」
「ポップス・・・」
「へえ、伝統的なアラブ音楽じゃないんだね。ラミアはどんな歌手のファンなの」
「ファイルーズのファンです。彼女がレバノンで一番上手いと思っています」
「他には」
「エリッサ、それにナンシー・アジュラムなんかも良いですね」
慎太郎が唯一憶えていたハイファ・ワハビの名前はラミア

の口からなかなか出てこなかった。
森の石松ではないが、「誰か大事な人を忘れていやしませんか」と言いたいくらいだった。

慎太郎は、しびれを切らして聞いた。
「ハイファ・ワハビなんかはどう」
ラミアは、驚いてその大きな目を見開いていた。
「え～、ミスター・イケナミは、どうしてハイファなんか知っているんですか～」
ラミアは大喜びだった。慎太郎がレバノンの歌手のことを知っているというのはラミアにとって思いも寄らないことだった。その大きな目は好奇心でキラキラと輝いていた。
「ハイファ・ワハビはダンサー出身で、歌はそれほど上手いとは思っていません」
「でも、凄く魅力的だよね・・・君はハイファそっくりだ。誰かにそう言われたことない」
ラミアの顔がぱっと明るくなった。ハイファに似ていると言われて満更でもなかったようだ。

「良く言われます。ミスター・イケナミに魅力的な歌手に似ているなんて言われて嬉しいです。大分ハイファがお気に入りのようですね」

ラミアは愛くるしげに少し首を傾け、慎太郎の眼をじっとみつめた。

そして、美しい栗毛色の長い髪を掻き揚げながら微笑んだ。ラミアの頬はほんのりと紅潮していた。慎太郎も、何だかハイファを引き合いに出し、それとなくラミアの美しさを褒めているようで照れ臭かった。

アラブ人にはアラブの音楽、別に伝統的な音楽でなくても良い、特に若者にはポップ系の歌手を知っていると受けが良かった。

慎太郎は、早速、石油省に挨拶に行くことにした。南に教わった石油省の担当者、数人に電話を入れてみたら、その内の一人、石油相の秘書官アブドル・アミーンがすぐに石油省

に来ないかと言ってくれたからだった。

大歓迎だった。日頃の三友商事や南の印象の良さが窺(うかが)い知れた。電話の感じでは、アブドル・アミーンの人柄は相当に良さそうだった。

本来は、南と一緒に行くべきだったが、南にはコンパウンド爆破事件後、当面リヤドに来ない方が良いと言ってしまった手前もあったので連絡することも出来なかった。

慎太郎は、いつもの通り、オスマの車の助手席に座った。

オスマは、いつも笑顔を絶やさず、“サー”、“サー”と言って慎太郎に人懐っこく話しかけていた。

慎太郎は、“サー”という言葉をホテルで嫌というほど聞いていたし、そのもともとの意味、貴族に対する敬称を考えると、サービス精神で気軽に呼びかけのように使っていることは分かってはいてもいかにも堅苦しくて抵抗があった。

そんなサービス精神を発揮する必要のないオスマには止めてもらおうと思って、先日、オスマに、“サー”は止めて“ミスター・イケナミ”と呼んでくれと頼んだ。

しかし、慎太郎が、そう言うそばから、「分かりました。サー」と言う始末だった。

ようやく、最近、“ミスター・イケナミ”と言えるようになってきた。

「サー、あっ、御免なさい・・・ミスター・イケナミ、今日はどちらへ」

「石油省まで頼む」

オスマの車にはアラブの音楽が流れていた。若者らしく、

ポップス系の女性歌手の曲のようだった。オスマは気持ち良さそうに曲に合わせ頭を揺らせていた。

「オスマ、良い曲だね。歌っているのはどこの国の歌手だい」

「レバノンです」

レバノンの歌手はサウジ人の間に人気があった。

慎太郎はさっきラミアから聞いたばかりの歌手の名前をオスマに言ってみた。

「ファイルーズかい」

ラミアが慎太郎の口からハイファの名前が出て驚いたように、オスマも慎太郎がファイルーズの名前を知っているのに驚いた。そして、楽しそうに応えた。

「違いますよ」

「それじゃ、ナンシー・アジュラムかい」

「え～、ミスター・イケナミは、どうしてそんなにレバノンの女性歌手の名前を知っているんですか。そうです。大当たり、ナンシー・アジュラムです」

オスマは、慎太郎の口から次から次へとレバノンの歌手の名前が出たのを盛んに嬉しがっていた。

「それから、エリサ・・・、ハイファ・ワハビも知っているよ」

ハイファの名前を聞いて、オスマは嬉しさを通り越して堪らず笑い出してしまった。

「凄いですね。短い間に随分憶えましたね」

「いやなに・・・ホテルではレバノン放送を見れるからね。この間は、ハイファ・ワハビが出ていたよ」

「ハイファ・ワハビは最高ですよ。今、サウジの若者の間では大人気ですよ。なにしろ、あのナイスバディ(素晴らしい体)ですから」

オスマはそう言うと意味ありげに微笑んだ。

「オスマ、ところで、さっきから盛んにハビビ、ハビビと歌っているんだけど、ハビビって一体どういう意味なの」

「そうですね。これは、歌には不可欠な言葉です」

「そんな感じはするね」

「女性だけではなく、男性にとっても重要な言葉です。なんだと思いますか」

「う〜ん、愛とか恋とかいう意味かな」
「残念でした」
「オスマ、焦らさないで教えてよ」
「はいはい、はいはい」
「オスマ、はいは一回で良いよ」
笑いながら慎太郎がそう言うと、オスマも笑いながら応えた。
「これは済みません。ハビビとは〝恋人〟という意味でした」
「そうか、分かった。そう言われてみると、他の曲でも随分頻繁に出ていたね。これは良い言葉を憶えた。オスマ、有り難う」
車の中の二人はいつもこんな調子のやりとりを楽しんでいた。オスマも慎太郎のことを気に入っていた。

丁度、そこで石油省に着いた。

石油省では、アブドル・アミーンが歓待してくれた。会って見て、彼がサウジ人ではないことはすぐに分かった。トー

ブではなく洋服姿だったからだ。顔も、インド人かパキスタン人のようだった。彼は、快く石油省の同僚数人を紹介してくれたが、いずれも高位の人物ではなかった。プロジェクトについて直ぐに相談出来るような相手ではなかった。

慎太郎は、アブドル・アミーンの電話の感触が良かったので、幸先良いスタートだと勝手に思い込んでいただけだった。

プロジェクト実現までには、やはり相当の時間が掛かりそうに思われた。慎太郎は、ガッカリしたが、すぐに、世の中はそんなものだと思い直した。慎太郎の気持ちの切り替えは実に早い。それが彼の長所の一つだった。もう、世間はそんなに甘いわけがないと考え直していた。

そんなこともあり、その日は、石油省からホテルに直帰(ちょっき)することにした。

オスマの車の中ではハイファ・ワハビの曲がかかっていた。

「ハイファの曲だね。オスマ有り難う」

「どう致しまして。丁度、ハイファの曲を持っていたから良

かったです」

慎太郎は、早速、慎太郎の好きな歌手の曲を用意してくれた、オスマの気持ちが嬉しかった。

お蔭で、慎太郎は、少し元気が出た。

慎太郎は、ホテルに戻りひと休みしてから、アル・コザマ・センターに行くことにした。アル・コザマ・センターは、ファイサリア・モールとは反対の方向にあった。ファイサリア・タワーのホールを抜け、右に行けばモール、左に行けばアル・コザマ・センターだった。

総ガラス張りの通路を通って、アル・コザマ・センターに向かって歩いていると、コザマ・センターの方からアラブ独特の芳しい香りが漂ってきた。慎太郎は、それに吸い寄せられるようにセンターの中に入って行った。

コザマ・センターは、切妻式の屋根のような形をしていて、両側の４階から８階までがレジデンスになっていた。その真中には吹き抜けの大きなホールがあった。丹下健三設計のこの独特なホールからは各階住居の廊下を見上げることが出来た。廊下の中央にはエレベーターが設置されていて、両側の住居はエレベーター脇の渡り廊下で結ばれている。

ホールの両側には、レストラン、店舗、事務所などが並んでいた。芳香は、左側奥にある商店の前に置かれた巨大な香炉からのものだった。高さが胸くらいまである、この香炉からは煙がゆらゆらと立ち上っているのが見えた。

近づくと、香炉の中では、小さな四角の銀色の炭があかあかと燃えていて、その上にはタドンのようなものが置かれていた。芳香のもとはこのタドンだった。直径三センチ強のタドンは、黒に近い焦げ茶色で木屑を何かで塗り固めたようなもののように見えた。

慎太郎は、立ち上がる煙を手で掬(すく)い臭いを嗅いだ。

「アッサーラム・アレイコム」
中から声が聞こえた。
「アレイコム・サラーム」
と言いながら振り向くと、そこにはトーブを着てシマーグなどを着けたサウジ人が立っていた。一八〇センチ弱の少し肥満気味のその男は店主のようだった。ファイサリア・モールの場合には外国人労働者が店員となっていることが多かった。ここは明らかに異なっていた。昔どおりのサウジ伝統の個人商店だった。市の中心地にある商店のせいか店主は英語が達者だった。
「この香りが気に入りましたか」
「ええ、素晴らしいです。高貴な香りですね」
「これはマーモールと言って、サウジ伝統の香りです。宜しければ、中に入ってみてゆきませんか」
慎太郎は、店主の勧めに従い店の中に入った。
中は大きく二つに仕切られていて、手前は、中央に洋風のアンティークな椅子とテーブルが置かれ、その前には同様のディスプレイ・キャビネットが置かれていた。キャビネット

の中には所狭しと、キラキラと光り輝くクリスタル・ガラスの容器に入れられた香水のようなものが陳列されていた。

「これらはインドの香水です。大変高価なものです」

クリスタル・ガラスの容器には、油のような黒いドロドロした液体が入っていた。店主は、その一つを空けると、クリスタル・ガラスの蓋に付いた液体を慎太郎の手の甲になすりつけた。プーンとタールのような臭いがした。慎太郎は強烈なその臭いに最初は馴染めなかった。しかし、少し時間が経つと馴染んで来た。不思議なことに馴染んで来ると忘れられない気になる良い臭いに変わっていった。

店主は、慎太郎のその様子を見てニヤリと笑った。

「これは、最高級の香水です。このひと瓶で一万リヤル(約三〇万円)します。良かったらいかがですか」

一万リヤルと聞いて、慎太郎はとうてい買う気にはならなかった。慎太郎は、店主に従って中に入って行った。

奥にも応接セットがあり、その脇には店主のデスクと椅子が置かれていた。こちらが事務室兼応接室だった。店主は、

慎太郎がマーモールの香りを大層気に入ったようだったのが余程嬉しかったのだろう。慎太郎に応接セットに座るように勧めコーヒーを入れた。

「うちのマーモールは、サウジで一番ですよ。大分気に入って頂いたようなので申し上げますが、実は、サウジ建国の主、アブドルアジズ大王愛用のものです。私の祖母がアブドルアジズ大王の香水師だったのです」

慎太郎は、この香りはただものではないと思っていたので、店主の説明に納得した。

「それで、このマーモールは一体いくらくらいするのですか・・・高いんでしょうね」

慎太郎は恐る恐る聞いてみた。

「そうですね。ロイヤル・ファミリー(王族)には、一オギア(二八グラム)四〇〇リヤル(約一万二〇〇〇円)で買ってもらっています。ロイヤル・ファミリーの方々は、それを五〇〇グラム単位で持ってゆきますよ。だいたい、七〇〇〇リヤル(二二万円)ですかね」

「その一オギアというのはどのくらいの量になりますか」

「まあ、大きさにもよりますが、四個か五個でしょうか」
「どのくらい持つものなんですか」
「一個で、二時間くらいは燃えていますかね。結構長く持ちますよ」
「しかし、一日一個焚けば、一週間持たないですね」
「そうです。ロイヤル・ファミリーの場合には、部屋数が多いし頻繁に焚きますから、一オギアで一日持つか持たないかでしょう」
「うーん、随分高いものですね。でも、この香りを味わえるのですから仕方が無いですか。私も今度、試しに少し買ってみたいですね」
「どうぞ、どうぞ、是非ご贔屓(ひいき)にして下さい。私の名前はハッサンと言います。宜しく」
そう言って、その店主は慎太郎に名刺を渡した。名刺には、ハッサン・ビン・ジャマールとあった。
「私は池波と言います」
「ところで、あなたはアラビア語は話せますか」
「いや、話せません。挨拶くらいは出来たら良いなと思って

少しずつ教えてもらっているところです」
「そうですか、実は、私の名前には、大変困った意味があるんですよ」
「ええっ。そうなんですか。良かったら教えてもらえますか」
「ビンという意味はお分かりと思いますが、これは単に、何々の子供という意味しかないのです。ところが、ジャマールとハッサン、両方とも美しいという意味でしてね。特にハッサンの方は美男子という意味があるんですよ」
慎太郎は、これを聞いてハッサンには悪いが笑ってしまった。ハッサンはまるで下駄のような四角い顔をしていて、色も黒く、お世辞にも美男子とは言えなかった。
「ほら、笑うでしょう。まったく、困っているんですよ」
「でも、ご両親は、何か、こう、思うところがあってお付けになったのでしょう」
慎太郎は分けの分からないことを言うしかなかった。ハッサンは面白い男だった。お陰で名前を直ぐ覚えた。性格も悪くは無さそうだったが、正直なところ慎太郎はハッサンの顔を直ぐには好きになれなかった。

慎太郎は、マーモールの香りが素晴らしかったので、翌日もハッサンの店を訪ねた。

店の前の巨大な香炉で、また、マーモールの煙を手で掬ってその高貴な香りをいかにも気持ち良さそうに嗅いでいると、店の奥でハッサンがそれを微笑みながら見ていた。

そして、立ち上がって、笑顔で表に出て来た。

「アッサラーム・アレイコム」

「アレイコム・サラーム」

「やあ、ハッサン、やはり、あのマーモールの香りが忘れられなくて、また、来たよ。このモールの中にも、マーモールを売る店があったけど、小さかったし、全く香りが違った。ハッサンの言う通り、ここのマーモールがサウジ一番かもしれないね。今日はそのマーモールを買いに来たんだ」

「有り難う。イケナミ。一オギアでも結構だよ」

「ところで、ハッサン、僕はロイヤル・ファミリーじゃないから、幾らかディスカウントしてくれる」

デパート売り場とほぼ同じで、従業員があまり権限の無いファイサリア・モールと、ここは違う。スーク(市場)で買物をする時のように、慎太郎は、思い切ってハッサンに言ってみた。

「うーん、それじゅあ、一〇%ディスカウントして、三六〇リヤルで良いよ」

「ハッサン、僕の収入は、ロイヤル・ファミリーの九割もあると思うかい。無いだろう。もっと、思い切って負けてよ」

ハッサンは、もともとのきょとんとした顔から、もっと目を丸くして慎太郎の顔を見つめると、

「えーい、それじゃあ。二五〇リヤル(七五〇〇円)で良いや。この泥棒め、持ってけ」

と笑いながら言った。そして、ポンと慎太郎の背中を叩いた。

ハッサンは、このようなやりとりを楽しんでいるようだった。慎太郎には、ハッサンがアラブ商人の典型のように見えた。

慎太郎は、ハッサンの気が変わらない内に、小さな香炉と炭と一緒に念願のマーモールを購入した。

翌日、ラミアにこのハッサンの話をしたら、「愉快な人ですね」と言って鈴を転がすような声を出して笑った。

ラミアは、モールには良く行くが、アル・コザマ・センターのこの店には行ったことがないと言っていた。一度は行ってハッサンの顔を見てみたいが、香水やマーモールの値段からすると、自分達には縁の無い店だと言っていた。

慎太郎は、ほとんど毎日のようにハッサンの店を覗(のぞ)くようになった。ハッサンも慎太郎の来るのを楽しみにしていた。行く度に、ハッサンとは親しくなっていった。

いつしか、ハッサンは、アラブ式の抱擁する挨拶(ハッギング)を慎太郎にするようになった。まず、左から、そして続いて右から頬を摺(す)り合わせ、軽く頬にキスをした。慣れない慎太郎には少しくすぐったかった。

不思議なもので、きょとんとしたようなハッサンの顔にも徐々に慣れた。ハッサンは本当に愉快な男だった。

ハッサンの英語が上手い理由がわかった。

若い時に、カリフォルニアの大学に留学したことがあるとのことだった。

その時の写真を、慎太郎に見せてくれたが、現在からは想像も付かない、細身で、かなりの遊び人のように見えた。まるで別人だった。勿論、洋服を着ていた。ポルシェと思われるスポーツカーに寄りかかった、その姿は、青春を謳歌している“いかれぽんち”の黒人のようだった。

ハッサンの事務室には、ヤマハの高級ステレオが置かれていた。彼は、思い出したように、ママス・アンド・パパスのカリフォルニア・ドリームをかけた。曲が流れると、昔の思い出に浸っていた。

「シンタロウ。ロングビーチは最高だよ。カリフォルニアの太陽は眩(まぶ)しかった。女の子達は、魅力的だった」

「ハッサンは、相当沢山楽しい思い出があるんだろうね」
「勿論さ」
とうっとりとしていた。
慎太郎は、今はトーブに身を包んで厳粛なモスレムとなっているハッサンが昔は放蕩(ほうとう)の限りを尽くしたのではないかと想像していた。

サウジではサッカーが国民的スポーツで、皆サッカーが好きだ。ハッサンも、サッカー大好き人間で、テレビ中継があると、贔屓のチームの試合を、“マイチームの試合”と言って見逃さなかった。
慎太郎は、時にハッサンの店で一緒にサッカーのテレビ中継を見ることがあった。ハッサンは、中継中でも客が来ると、ちゃんと応対に出た。そこはしっかりとしていた。
サッカーに対する熱中は大変なものだった。
マイチームの選手がゴールをすると、立ち上がって歓声をあげ、逆に、ミスでゴールを外したりすると口に泡を飛ばして選手を罵倒し、落ち込んでいた。本当に熱い。

ハッサンも昔はサッカー少年で近所の空き地などで朝早く涼しい内に盛んにサッカーをしていたらしい。今の体型からはとても想像出来ないが、足の速いフォワードで、いつも先頭を切ってゴールを決めていたと自慢していた。

ハッサンの店では天下泰平で、テロのことを忘れてしまいそうになる。ハッサンは、マーモールの他にもマプスースというマーモールより香りのきつい、木切れを香水に浸したようなものがあることなど、サウジの香りのことを教えてくれたり、美味しい羊の肉を売る店を教えてくれたりした。

そんな彼だったが、時に政治の話をすることもあった。アメリカに留学した経験があるというのに、いきなり、「アメリカ人は、サウジのことなど親身に考えてはいない。石油が欲しいだけさ」と手厳しいことを言ったりする。

「イスラエルの後押しをしているアメリカは嫌いだ」

そんなことを聞く度に慎太郎はサウジの現実に引き戻された。

暫らくして、慎太郎はハッサンの家に誘われた。

ハッサンはその時に面白い物を見せたいと言うだけで何とは言わずにニヤニヤとしていた。思わせぶりだった。ハッサンは慎太郎の興味を惹きたいためそう言ったのだろうが、慎太郎は、むしろセキュリティ問題を考えて戸惑っていた。

結局、ハッサンのような店主がテロリストと繋がりがあるとは思えなかったしこれまでの言動から信用出来ると考えられたので思い切って連れて行ってもらうことにした。

当日、慎太郎は、モールのブランドショップでチョコレートを土産に買いハッサンの店に行った。チョコレートはアラブ風に気恥ずかしくなるほど豪華に包装されていた。

ハッサンの愛車はトヨタのランドクルーザーだった。ハッサンは、日本車は最高だと盛んに褒めちぎっていた。慎太郎は妙に褒めるなと思っていたが、ハッサンからするとトヨタも、三友商事も、そして慎太郎も皆一緒くたの日本で、慎太郎に気を使っていたのだろう。

二人の乗った車は、ファハド大通りを北に向かった。
高級住宅街の方向だ。ハッサンの家はシェラトン・ホテルの近くでファハド大通りを挟んだ向かい側にあった。大通りを左に入ると、すぐに静かな住宅街になった。辺りには大きな家が沢山並んでいた。車は、門構えが一段と立派な邸宅の前で止まった。

邸宅の周囲は、高さ三メートルほどの塀で囲まれていた。そして、その塀の上には、有刺鉄線が張り巡らされていた。リヤド市内の大きな家の回りには、このように有刺鉄線が張り巡らされていることが多い。
イスラムでは泥棒は厳罰で手首から先を切り落とされる。泥棒はいない筈と思っていた慎太郎には、この有刺鉄線がいつも不思議に思えた。

塀の中央にはまるでバッキンガム宮殿のような豪華な黒い鉄製の門があった。その黒い門の脇には、大きなシャッタ

ーが付いていた。

ハッサンは、そのシャッターの方向にリモートコントローラーを差し出し、そのボタンを押した。すると、シャッターは静かに上がり始めた。

シャッターの向こうには芝の生えた大きな庭が広がっていた。その庭には街路灯が点々と置かれ奥の邸宅へと続く舗装された道を照らし出していた。

車が中に入ると、後ろの大きなシャッターは静かに閉まった。

ランドクルーザーは、邸宅の手前に突き出た四角なコンクリート打放しの建物の前で止まった。この建物は、高さ三メートル、幅四メートル、奥行き六メートルほどの大きさでまるで防空壕のように頑丈そうなものだった。正面には、黒い鉄製の扉が付けられていた。

ハッサンがその扉を開けると、中は、外観とは対照的に伝統的なアラブ式の応接間だった。木材をふんだんに使用したログハウスのように見えた。天井には太い木の梁も何本か張り巡らされていた。床には、厚いペルシャ絨毯が敷かれ、周りの壁に沿って、柔らかいクッションの背もたれが置かれていた。

ハッサンは、慎太郎にその一角に座るよう勧めた。

そして、テーブルの上に置かれたアラビアのティーポットからアラビアン・コーヒーをお猪口(ちょこ)のような小さな湯呑(ゆのみ)に注ぐと、慎太郎にそれを勧めた。

慎太郎は礼を言って湯呑を受け取ると、早速、それを啜(すす)った。アラビアン・コーヒーの刺激的な香りは、飲んだ後、暫らくは口の中に残っていた。慎太郎はその余韻が気に入っていた。

「ちょっとここで休んでから、そこのエレベーターで地下室に連れて行ってあげるよ」

ハッサンの指差す方を見ると、部屋の隅には、さらに頑丈

そうな鉄製の扉のついたコンクリート打放しの出っ張りがあった。

「ハッサンが言った面白いものというのは、その地下室の中にあるのかい」

「行ってみれば分かるよ」

ハッサンはにやにやとしながら言った。

ハッサンは、隅の扉を開けた。そこには、二機のエレベーターが設置されていた。いずれも五人乗りで、下降スピードは一分間に三〇〇メートルの速さとのことだった。六秒ほどで下に着いた。したがって、地下室の位置は、深さ三〇メートルということになる。

エレベーターの扉が開くとそこは光に満ちた広大な空間だった。

地下室というよりも、一流ホテルの中庭という感じだった。高さ五メートル、幅五〇メートル、長さ一〇〇メートルはあった。地面には芝が敷き詰められていた。芝には、ところど

ころ大きな椰子(やし)の木が植えられていた。芝の先には、
潅木(かんぼく)が植えられ、赤、白、黄、ピンク、マゼンタ、
紫のブーゲンビリア、赤、白、ピンクの夾竹桃、白い日日草、
紅白のバラなどの花々が咲いていた。

「シンタロウ、この中は、一年中、ロングビーチの気温に合
わせてセットしているんだ。普通は二〇度から二五度程度に
保って、泳ぐ時には二八度程度にしている」

確かに、潅木の先には幅五メートル、長さ一〇メートル程
度の小さなプールがあった。プールの脇にはジャグジーバス
があった。プールには水しぶきが上がっていた。

良く見ると、小さな女の子が一人で泳いでいた。小学六年
生くらいだろうか。

「ハイファ。こっちへおいで」

慎太郎は、その女の子の名前が、お気に入りのレバノン歌
手と同じ名前で驚いた。その子は、プールからあがりこちら
に歩いてきた。

ハッサンに似ず目の大きな可愛い子、というよりも、美人と言って良かった。恐らく夫人は相当な美人に違いないと慎太郎は想像した。生憎、肌の色はハッサン程ではなかったが浅黒かった。スタイルは抜群で、かもしかのような細い長い脚をしていた。濡れた髪を手で掬いながら近づいてくる、その姿はまるで映画の中のワンシーンを見ているようだった。

「シンタロウ、こちらが娘のハイファだ」

ハッサンは自慢げに紹介した。

「アッサラーム・アレイコム」

慎太郎がそう挨拶すると、娘は愛くるしい笑顔で

「アレイコム・サラーム」

と挨拶をした。

「ハイファ、ママはどこ」

ハッサンがそう言うと、ハイファはプールの脇の小さな東屋の方に走って行った。

ハイファは、東屋に入り、美しい女性と一緒に出て来た。その女性は、黄色の、光沢のある柔らかな絹のストレッチ・ドレスを着ていた。その鮮やかな姿は、周りから浮き出ていた。慎太郎が想像したとおり、近寄り難いくらい気品に溢れた知性的な美人だった。色白で、妖艶(ようえん)で、まるでフランスの貴族のようだ。

「リナ、こちらが慎太郎さんだ。日本から来て、アル・ファイサリア・ホテルに滞在している。ここのところ良くお店に来てくれてね」

慎太郎は、リナにもアラビア語で挨拶をした。

リナの周りには、バラの芳香が漂っていた。その笑顔は魅力的で見る人の心を惹き付けずにはおかない。慎太郎が持って来た豪華な包装のチョコレートを渡すと満面に笑みを浮かべた。それが、また一際、美しかった。

リナは英語が上手に喋れないとのことで、ハッサンは、紹介だけすると、リナとハイファを、また、プールの方向に戻らせた。

ハイファは、水着のまま、アラブ風にくるくると回る踊りをしながらプールに向かった。ターンをする度に、ハイファの笑顔が見えた。アラブの女の子は皆踊り好きだった。

サウジでは、男女別々にパーティが開かれる。

慎太郎は、女性のパーティーに出たことがないので見たことはないが、女性のパーティーでは、皆、アバヤは脱いで、思い思いの綺麗な服を着て踊りに興じているという。

それはそれは艶(あで)やからしい。

「慎太郎、どうだ。家内は美人だろう。慎太郎は知らないかもしれないがよくジャンヌ・モローにそっくりだと言われている」

「知っているよ。でも、奥さんはジャンヌ・モローよりもスタイルが良いんじゃないの」

ハッサンはご満悦だった。ハイファは、また、プールに飛び込んだ。リナは、プールサイドでそれを眺めていた。ロングビーチというよりも、ハリウッドの高級住宅街にいるような感覚だった。

「慎太郎、ハイファというのは、細い美しい体という意味がある。その名の通りだろう」

慎太郎は、初めてハイファの意味を知った。ハッサンの娘はその通りだが、レバノンの女性歌手と受付のラミアは相当なグラマーで大分違うなと思っていた。

「慎太郎、実は、ここは核シェルターなんだ」

「・・・・・・」

慎太郎は、呆(あき)れ果てて声も出なかった。

「イラン革命をきっかけにした第二次石油危機では、原油価格が急上昇して一時三七ドルになった。その時はサウジにも大量のオイルダラーが流れ込んできた。一九八六年には約二〇〇億ドルに落ち込んでいたサウジの輸出収入は一九九〇年には四四〇億ドル以上になった。更に一九九二年には五〇〇億ドルを超えた。ロイヤル・ファミリーから、香水、マーモールなど大量の注文が来て私も大分儲かった。それは良か

ったのだが、その時イランに出来たシーア派の革命政権が恐くてね。湾岸諸国もイラン革命の嵐に巻き込まれるという人もいて、これはいかん、何か対策を講じなければと思った。イランが攻め込んだ時に備えて、このシェルターを作ろうと決心したんだ」

「ハッサン、気持ちは分かるけど。攻め込むのは軍隊で、核攻撃じゃないんじゃない。それに、攻め込まれたら、ここにいてもどうしようもないんじゃないの」

「慎太郎、ここには、食糧・水も一ヵ月間分は貯蔵してある。それくらい潜んでいれば、米国や国連が助けてくれるんじゃないかね。核シェルターにしようと思ったのは、イラクのフセインからの核攻撃を意識したものだった。しかし、これからは他の国からの核攻撃も考慮しておいた方が良いかもしれない。イランも心配だし、湾岸諸国が核を保有すれば、イスラエルだって核攻撃をする可能性もある」

慎太郎は、ハッサンが大真面目でそう話すのを聞くと、核不拡散条約、それに世界の世論を考えれば、それは荒唐無稽だと言うことも出来なかった。それに、ドイツ、北欧は核シ

ェルターを持っているようだし、超大国も核攻撃に対する備えがある筈だ。

「核攻撃に対しては、二週間くらい、ここにじっとしていれば大丈夫だ。最高の機能の空気清浄機も付けている。ほら、空気が地上よりきれいだろう」

確かに爽やかな空気に満ちていた。

ハッサンは、いろいろと説明をしてくれていたが、慎太郎は、プールサイドにいる美人の親子に気をとられていた。

この空間は、まさにパラダイスだった。いつしかハッサンは、また、あのママ・アンド・パパスのカリフォルニア・ドリームをＢＧＭにして悦にいっていた。きっと、また、カリフォルニアの青い空、青い海、そして、金髪のグラマーなガールフレンドのことも思い出しているに違いない。

慎太郎は、ハッサンの桁違いの贅沢(ぜいたく)な生活ぶりに呆気にとられていた。そして、ハッサンはロイヤル・ファミリーにマーモールなどを納入しているだけではなくもっと密接な関係があるのではないかと思い始めていた。